

## 本団創立三十周年を迎う

思えば大正八年一月(二十五歳の時)、飯室村において本団を創立してから、星霜いっしかに流れて、ここに三十周年を迎えることができた。感慨無量。ただ仰いで仏天の鴻恩に泣き、伏して同胞の護念に哭くことである。大悲常照の加被力なくして、また念仏の同胞のご念力、不退転の精進なくして、どうして今日あることができようか。ただ合掌恭敬してこの大恩を謝せんと思う心で胸が一ぱいである。

つらつら思い返せば、大正十二年春五周年を迎え、その記念大会を催して後、周囲の状況が私をして飯室の地にあることを許さなくしてしまった。飯室の地を去らねばならなくなった。それからすでに二十五年を経過した。この二十五年間はもっぱら正法を頂戴しつつ、同胞の胸より胸に巡礼の旅を続けさせていただいた二十五年であった。まことに煩惱、人にすぐれて熾盛、悪業またきわめて深重なる私であり、世の中もまた生死の苦海の名にたがわず、さまざまな大変転をとげた三十年であった。火の河、水の河、山また山、坂また坂、人の世の喜怒哀樂をつぶさに経験しつつ、きわめてのろい歩みではあったが、願生の一道を続けさせていただき、ただ念仏のみを細々ながら相続させていただくことができた。今日に至って、ほかの一つ覚えであったこのこと一つが私を生かして下さった。思えばまことに念仏一つである。そしてそれが私のただ一つの生きがいであり、喜びであり、生命であり、すべてである。お念仏がなかったら私には何も無い。如来廻向の念仏のみが私のすべてであることを、今さらのように、このことを、この上なく喜ばせていただくことである。

その上に私にとってまことに感謝に堪えないことは、御同胞を恵まれたことである。ともに如来聖人のみ教えを頂き、同一念仏に生きさせていただく同胞を与えられたこと、教法の真実なることを身をもって立証して下さる御同胞と同一念仏無別道故の歩みを続けさせていただくことは、何というありがたいことであろうか。この有縁の同胞に、助けられ、教えられ、励ましていただいた三十年であった。欠点多き私を許し、無力な私を助けて今日の日を迎えさせて下さったこと、全く同胞の証誠護念のたまものである。

顧みればこの三十年間にはさまざまな宗教や修養団体が生まれたが、その多くはすぐに倒れてしまって、わが真宗光明団はついに三十周年を迎えることができた。これ全く仏恩であり、祖師聖人の恩徳である。

今三十周年を迎うるにあたり、深く心に誓うことは、いよいよ忠実に教法を聞信して、より純粹に一道を精進させていただき、生くる日の限りを教法のためにあらしめたいことである。教法を聞信して信一念に安住し、何ものをも求めてはならない。ただ忠実に正法に信順して全我を本願に託して、一生不退転に歩ませていただくこと、それがたった一つの今日の私の心根である。一日生きれば一日、一月命あらば一月、一年与えられるならば一年、ただ正法に生きさせていただいてこの鴻恩を報じなければならぬ。恭敬合掌、ただ限りなき感謝の中に念仏させていただくことである。